日本学術振興会に紙媒体で提出する必要はありません。

1版

様　式　Ｆ－７－１

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）実施状況報告書（研究実施状況報告書）（令和元年度）

機関番号	４２６７６

所属研究機関名称		大妻女子大学短期大学部
研究代表者	部局	国文科
	職	准教授
	氏名	中尾　桂子

１．研究種目名　基盤研究(C)(一般)　　２．課題番号　18K02847

３．研究課題名　自律的な積み上げ学習につながる授業内・外学習時のメタ認識出現条件

４．補助事業期間　平成３０年度～令和２年度

５．研究実績の概要

本研究は，学習者自身の学習に対するメタ認識が活性化される条件を探ることにある。授業で目標に向かって積み上げていく学習について，また，授業外で日々機械的に積み上げていく学習において，学習者自身が自律的に学習を活性化させていく条件を検討するものである。学習プロセスを観察し，学習者の認識を観察することで，学習におけるメタ認識が意識される条件を特定することを目指している。その最終目的は，どのような学習環境を教室で教師が作るのが，学習者の支援となるのかを確認することにある。また，その後の自律的学習につなぐ観点を探ることにある。

研究方法としては，期間，目標，内容，教員の異なるいくつかの授業の流れと，授業とは関係なく，学習者が授業外で自律的に進める学習プロセスと意識を観察し，授業参加者，授業外学習継続者の意識を分析することで，学習者のメタ認識条件を探ろうと考えている。具体的には次のように実施する。

授業内の学生の関心点を観察するため，授業後に，授業課題に対して関心を覚えた点とそれに対してどのような行動をとったかを記述に残すように指示し，その記述内に見られる学生の認識が，メタ認識に関わるものか，個人的関心のものか，個人的に見たテーマに関連するものかをラベル付けして，分析する準備とする。また，学期の開始時，途中，終了時に内省した授業への個々人の参加状況を，学期末に並べて比較し，学習者の意識，メタ認識に関する言及回数，場面，対象を調べ，それらに関する考えや意識を質的に分析する準備とする。

授業外の学生の関心点，継続の動機を確認するために，教職者に，授業外で授業とは関係ないが必要だと考える学習を続ける動機と，継続，結果に関する意識を調べる。

これらの調査の結果を総合して，自律学習のための教師の支援のポイントを探る。

６．キーワード

メタ認識　自律学習　授業内・外学習　学習支援

７．現在までの進捗状況

区分　（4）遅れている。

理由

2020年度前期の授業形態が変わり、実施条件が前年度までと異なったこと、ならびに、授業自体の閉講で授業外学習システムと連動させた授業実践の機会がなくなったことで、大きく方向転換するほどではないが、授業観察の観点と分析観点を再検討している。

2018年度の実践と印象調査から、「自主性」、「客観視」、「見守り感覚」が意識できる環境整備がメタ認識活性化に効果的だと判断された。そこで、2019年度は、授業後の「振り返り」の記述行為を、「自主性」、「客観視」、「見守り感覚」が意識できる環境下におくために、漢字学習システムに加えて新たに、アカデミック・ライティングクラスで掲示板を利用する形で実践した。

2018年度後半～2019年度後半にかけて、＜成績に関係ない＞行為として、①漢字システム上での教師の＜見守り＞、または、②掲示板でのクラス全員の＜見守り＞を受ける状況を設け、アンケート、または、掲示板で、自らの学習結果、プロセスへの＜内省記述＞を指示した。この自主的な内省時の記述に、メタ認知的知識の3要素（三宮、2018）である、課題、方略、（自身の特性の）客観視、3点の記述が見られたこと、また、見守りという状況、授業目標と到達点の明確な理解、到達点への自身の到達度に対する批判的考察が見られることから、メタ認識と学習促進に有益な影響を与えると考えられた。

2020年度は、メタ認識活性化条件として、見守り意識、客観視、自主性の活性条件をより詳細に検討する予定であったが、授業形態が変化したことで（オンライン化、海外協力校の授業閉講）、上記①②の＜見守り＞状況とは異なる環境下での観察に替えた。現在、2019年度までのメタ認識意識について授業種別に分析を進めているが、さらに、オンライン授業における「自主性」、「客観視」、「見守り感覚」が意識できる環境と要因を考察するために調査観点を見直している。

８．今後の研究の推進方策

調査結果の総合的な分析と考察を行なうために、最終年度も，2019年度に新規依頼した協力校と合わせて授業実践とその観察を継続して観察対象と記録を増やす予定であったが、2020年度前期は、２つの問題：授業外見守り漢字学習システムを用いる予定の日本語の授業が，協力校，担当者ともに閉講，その他の全担当授業がオンライン化，これらにより、現状に即した観察が主となる。

そこで，担当授業の全てにおいて，講義，演習の種別に関係なく，全授業の学習後に記述式内省活動を組み込むこととする。2019年度には教員と学生の授業内外の境界に対する意識が異なっている点が観察観点の指標化においての課題であったが，2020年度前期は全授業のオンライン化で，オンデマンド型の授業は，より一層，内外の境界があいまいになる。また，Zoomを用いたピア・ラーニング活動では，一度も面識のない学生どうしのコミュニケーションのための時間を設けることにより，授業課題実施と人間関係のためのコミュニケーションの時間の境界分けが不可能になる。したがって，分析時に，学習に関する内外境界の意識を確認するのではなく，何を指向するかという点で意識化される点を見ることとし，記述式内省シートのフォームを変更する。

2020年度前期のオンライン授業は全11回の実施となるため，5，6回目以降から記述式内省活動を実施し，「振り返り」の促進状況，プロセスを観察する。また，「自主性」は，成績に関係なく実施を指示される振り返りを行うか，また，継続するかという点で観察し，さらに，オンライン授業での教員，学生同士の目線に対する意識や，やさしさという感覚を感じるかという印象調査によって「見守り」の印象を観察するものと替える。

９．次年度使用が生じた理由と使用計画

2020年度は、協力機関との打合せを兼ね、参加を予定していた国際会議が中止、または、オンライン開催等での秋以降への延期となったため、助成金予定利用の方法を次のように利用する。

①オンライン会議に参加するのに適切なカメラと画像処理機能を搭載するハードディスク・メモリー容量の大きいコンピュータ、②オンライン授業での学生の動向確認を支援するためのスケジュール管理用モバイル媒体機器、③秋以降の出張費（研究分担者、協力者との打ち合わせ、学会発表、資料収集のために予定しておく）、④音声データの文字起こし、⑤授業観察と学習者の記述、個々の学生に対するインタビューの記録は、Zoomを経るものとするために音声データの文字起こしを業者に依頼、⑥本研究成果とシステムマニュアルを合わせた配布用CD付き冊子（配布用パッケージCDの作成、システムの利用方法を書いたマニュアルに、本研究成果を合わせた冊子を作成する）

１０．研究発表（令和元年度の研究成果）

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 中尾桂子	４．巻 52
２．論文標題 「発問」に基づく授業デザインと振り返りの試み：改訂版タキソノミーを援用した教師のためのCan-doリストの開発にむけて	５．発行年 2020年
３．雑誌名 大妻女子大学紀要，文系	６．最初と最後の頁 146-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 中尾桂子	４．巻 51
２．論文標題 文化的要素からみた授業分析-就労支援日本語クラスの教科書分析から-	５．発行年 2020年
３．雑誌名 大妻国文	６．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

日本学術振興会に紙媒体で提出する必要はありません。

1版

1．著者名 中尾桂子・森下淳也	4．巻 2019
2．論文標題 動機づけの観点からの漢字「見守り」学習―漢字読解支援教材作成キットを用いた授業外学習設計の有用性―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 EAJE ベオグラードシンポ論集	6．最初と最後の頁 ―
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

1．著者名 中尾桂子	4．巻 2019
2．論文標題 教師のための授業での文化的要素内省シートの開発―就労支援日本語クラスの教科書分析から―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 APJE シンポジウムアリカンテ大会論集	6．最初と最後の頁 39-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 中尾桂子
2．発表標題 自主的で焦点が明確な振り返りとメタ認知促進の関連性
3．学会等名 日本リメディアル教育学会 第8回関東甲信支部会
4．発表年 2019年～2020年

1．発表者名 中西千春・川井一枝・中尾桂子
2．発表標題 タキソノミー・テーブルを活用した英語授業デザインワークショップ -ブルームの改訂版の教育目標-に基づいて-
3．学会等名 大学英語教育学会第58回国際大会（名古屋、2019.8.30）
4．発表年 2019年～2020年

１．発表者名 中尾桂子
２．発表標題 掲示板を利用した「振り返り」の可能性：見守り，客観視，自主性とメタ認知の関係から
３．学会等名 公益社団法人 私立大学情報教育協会「2020年度ＩＣＴ利用による教育改善研究発表会」
４．発表年 2020年～2021年

〔図書〕　計0件

１１．研究成果による産業財産権の出願・取得状況

計0件（うち出願0件／うち取得0件）

１２．科研費を使用して開催した国際研究集会

計0件

１３．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

－

１４．備考

－